

「こんな地域と職場をつくりたい」運動全国交流集会・特別報告（2021/5/15）

当事者が立ち上がり、自らの資源をいかし、 力を発揮するコミュニティ・オーガナイズング

—「保健師、保健所職員増やしてキャンペーン」について—

大阪府関係職員労働組合

はじめに

コロナ禍の中、保健所業務は瞬く間にひっ迫していきました。労働組合として何ができるか、何をしなければならないかを考え、取り組んだ「保健師、保健所職員増やしてキャンペーン」について報告します。

今年のちょうど今ごろ、コロナ第一波がやってきました。その頃から保健所は急激にひっ迫していきます。もともと保健所は余裕のある職場ではありませんでしたので、「もう限界だ」という声は次第に大きくなっていきました。昨年4月の時点で時間外勤務が160時間を超える保健師もいました。その一方で、吉村知事の人気は急上昇し、出口戦略や大阪モデルといった、もうコロナが収束するかのような言葉が並べ立てられ、保健所の状況など見向きもされない状態でした。

これまで維新府政の中で、何もかも悪くなる一方で、公務員バッシングも受け続けてきましたので、保健師や保健所職員の中にも「公務員だから仕方ない」「どうせ変わらない」といったあきらめ感も漂っていたと思います。

この「公務員だから仕方ない」「維新府政だから仕方ない」という状況をどうすれば変えられるか、この間、私を含め、府職労で学び、

実践しているコミュニティ・オーガナイズングでの学びを生かして、キャンペーンをすることを考えました。

問題の当事者である保健師、保健所職員が自分たちの持てる資源を生かしてパワーに変えていくために、保健師、保健所職員と青年部役員と私でキャンペーンチームを立ち上げ、気持ちを共有することから始め、戦略を立てました。

どうすれば、力関係を変えて、要求が実現できるか—戦略のタイムライン

戦略を立てるうえでの大事なポイントは、「これまでやっていたからやる」とか「とりあえずやってみる」とか、今までの経験や方針にのみ縛られるのではなく、どうすれば今のパワーバランス、力関係を変えて、私たちの要求を実現し、ゴールが達成できるのか、そして、当事者である保健師、保健所職員に「この戦略なら変えられるかもしれない」という希望を持ってもらい、ともに立ち上がってもらえるかということでした。

では、どんな戦略を立てたのか。私たちがキャンペーンを始める前の力関係は、明らかに知事や部長にパワーが集中していました

(図1)。そもそも彼らには権力がありますし、マスコミや府民の支持、期待も得ています。そして、大阪府では職員基本条例によって職員を増やさないとというルールまで作られていましたので、彼らは「外部委託でなんとかなる」とか「大企業とワークシェアすればいい」とか、好き勝手なことを言い、現場の声には耳を傾けず、職員にはガマンさせて黙って働かせようと考えていたわけです。

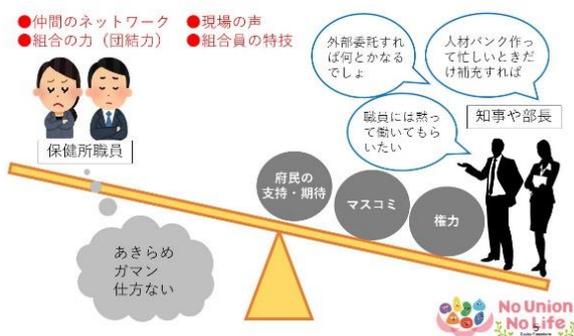


図1 権限を持つ知事や部長に傾いている現状

では、この力関係をどうすれば変えられるか、そのために当事者である保健師、保健所職員の持つ資源をどう使えばいいのかを考え、仮説を立てました。私たちが考えたのは、当事者である保健師、保健所職員の持つネットワークや専門職としてのスキル、そして何よりも現場の声を生かすことで、変化を起こそうということでした。そのために、現場の声を発信し、オンライン署名にも取り組み、保健所の組合員も増やしていこうということを決めました。

このことによって、マスコミや府民の支持や期待を私たちのほうに傾かせることができると考えました(図2)。こうやって力関係を変えることができれば、私たちのめざすまず初めの第一歩のゴールである保健師、保健所職員を増やすということを達成できるのではないかと考えました。

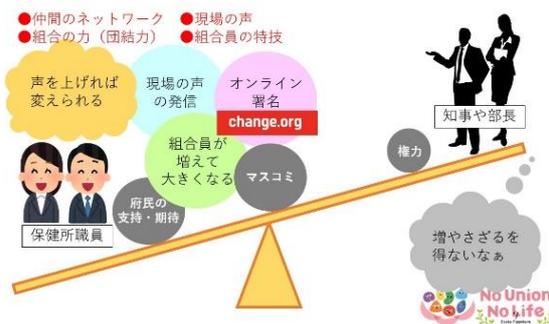


図2 当事者の声と世論などで傾きを変える

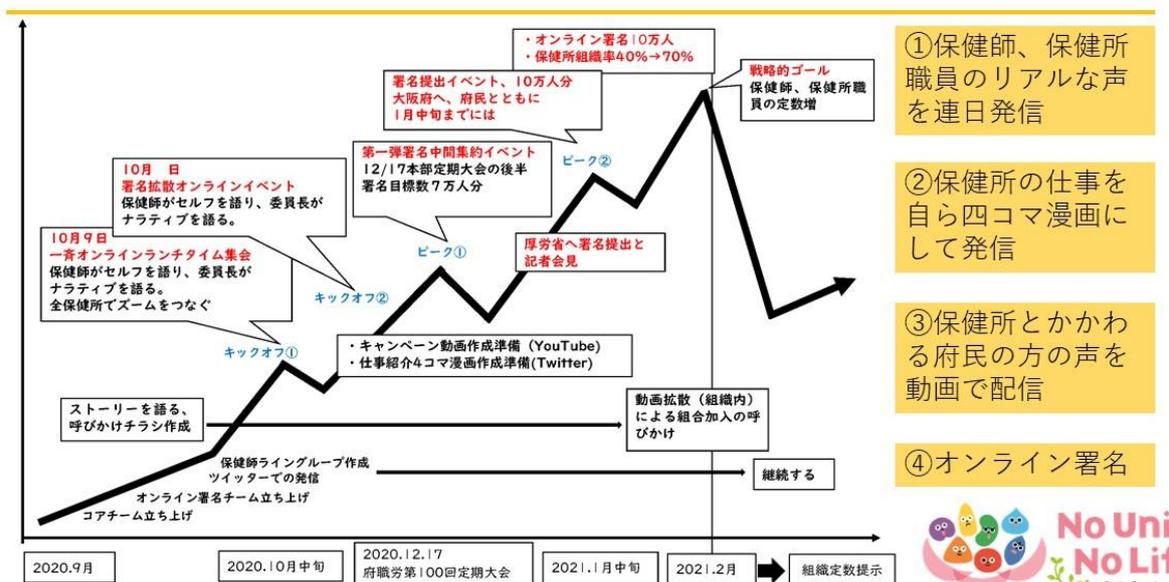
こういった議論を経てできたのが、このキャンペーンのタイムラインです(次ページの図)。このタイムラインのポイントは、主に次の4つです。①保健師、保健所職員のリアルな声を連日発信、②保健所の仕事を自ら四コマ漫画にして発信、③保健所とかかわる府民の方の声を動画で配信、④オンライン署名です。

当事者である保健師、保健所職員の声をパワーに変える

まずは保健師さんや青年部役員を通じて声をかけ、LINE グループを作ったたくさんの保健師、保健所職員とつながり、毎日声を聞くことから始めました。

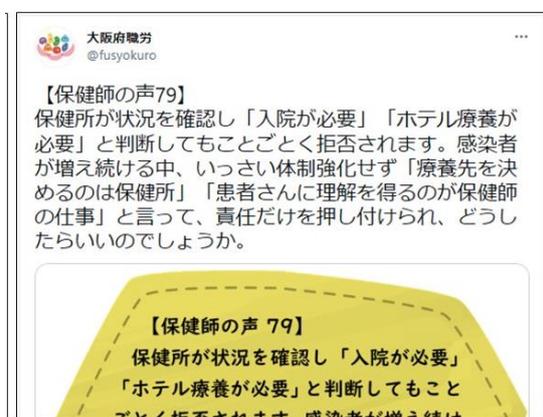
そして、私たちの考えた戦略をみんなに伝え、気持ちを共有するために、府内に9つある保健所と組合事務所をつないでのオンラインランチタイム集会を3回開催しました。ここでは、保健師さんに保健師としての思いを語ってもらったり、それぞれの保健所の近況を報告するリレートークをしたりして、みんなの気持ちを共有することを心がけました。この集会に参加していた組合未加入の青年が「感動しました」と言って、組合に加入したといううれしい報告もありました。心を動かしたことで、組合加入という行動に結びつい

戦略のタイムライン



た結果です。

そして、保健師、保健所職員から寄せられる声を連日発信しました。そのツールとしてツイッターを活用しました（下図）。



ツイッターのすごいところは、瞬時にして私たちの声をダイレクトにたくさんの人に伝えることができ、さらにその声が広がるということです。一番反響のあったツイートに対し、リツイート、拡散してくれた人は4,548人。何かコメントをつけて拡散してくれた人が523人。その結果、このツイートを見た人は、230万人を超えました。

コロナ禍でビラ配りや街頭宣伝はなかなかできませんし、そもそも多忙な保健師さんたちにそんな余裕もありません。しかし、ツイッターでは、これだけの人に声を届けることができるんです。

今回のキャンペーンを通じて、大阪府職労のツイッターアカウントをフォローしてくれる人も劇的に増えました。昨年の3月には950人でしたが、今や4570人となっています。約5倍以上です。そして、今ではどんなツイートをしても5千人から1万人近い人に見てもらえる状態になっています。ツイッターを見て取材を申し込んでくる新聞、テレビ、雑誌の記者の方も多数おられます。

また、保健師さんたちが仕事を通じて培ってきた繋がりを生かしてのイベントも開催し、保健所と関わりのある団体のみなさん、難病患者団体や断酒会の方、地域の支援団体のみなさんに一緒に声を上げてもらうことができました。このみなさんの声はYouTubeでも配信していますので、[大阪府職労チャンネル](#)か

らぜひご視聴ください。

こうして少しずつ現場の声が広がり、それを通じて寄せられる励まみやねぎらい、応援の声を保健師や保健所職員に伝えることで、今までの絶望やあきらめが「もしかすると変えられるかもしれない」「声をあげてもいいんだ」という希望へと少しずつ変わっていきました。そして、今度はコロナだからじゃなくて、もっと保健所の仕事や役割を知ってほしい、きっとそのことが将来の公衆衛生の向上

知ってください！保健師のシゴト
～コロナ編（疫学調査）～



につながるという思いで、保健師さんたちが忙しい中、それぞれの得意分野も生かしながら、少しずつ分担して、保健所の仕事をわかりやすく伝えるための四コマ漫画（左漫画）を作るようになりました。そして、この漫画も

ツイッターを通じて発信し、「保健所って、こんなこともしてたんですね」「今まで知りませんでした」というような反響もありました。

初めてのオンライン署名、64,066人の賛同

こうした取り組みを通じて、少しずつオンライン署名の賛同も広がり、最終 64,066 人の賛同をいただき、厚生労働大臣と吉村知事あてに提出し、現場の保健師、保健所職員がテレビカメラやマスコミの方の前で、勇気を持って声をあげることができました。このオンライン署名は、私も初めての経験でしたので、まずはオンライン署名サイトが主催する初心者セミナーに参加して学ぶことから始めました。

オンライン署名が万能だとは思っていませんが、ネット環境さえあれば、スマホでもいつでも簡単に始められ、一気に全国的に広げることができる、そして何よりも署名に賛同してくれた人と繋がることができ、署名だけじゃなく、応援のメッセージが受け取れたり、こちらから進捗状況のメールを送ったり、双方向のコミュニケーションが取れるという点では、とても有利性があると感じています。



今回のキャンペーンでも 640 件のコメントが届きました。ごく一部ですが、紹介しています。

・「心から賛同します。公務員バッシングの中心点の大阪で声を上げている勇気にこちらが励まされます」

・「現場のリアルを知れば知るほど、いま増やさなければいけない！現場の実態をふまえた施策にすべき！と強く思っています。いまずぐ自分にすべきことをやろうと思います」

寄せられる応援の声が現場の仲間の力に！

私たちはこのキャンペーンを通じて、本当に大きな力を得ることができました。署名提出や記者会見、その後のマスコミ取材などでも、保健師、保健所職員は大きな恐怖感があったと話しています。

でも、それを乗り越えられたのは、私たちがこのキャンペーンを通じて孤立することなく、多くの住民のみなさんと結びつき、背中を押していただくことができたからです。それは、「後押ししてくれた人の顔が浮かび、変わるかもしれないという希望があった」「公務以外の方々と一緒に伝えることができ、自分たちだけで訴えているときとは全く違う何か大きな力に支えられていると感じた」という彼女たちの言葉からも伝わってきます。

<記者会見後の感想>

・「正直なところ怖くなったりもしました。でも、一歩踏み出すことで何らかの変化につながることを今回のキャンペーンで実感させてもらえました」

・「自分の気持ちを言うことへの不安や抵抗感があり、たまらない恐怖感がありました」

・「6万人を超える署名の重みとともに、後押しして下さった方々の顔が浮かび、また一緒に頑張ってきた仲間の想いを噛みしめると胸がいっぱいになって、何回泣きそうになったか分かりません。変わるかもしれないという希望がありました」

・「自分たちの仕事や公務の大切さを公務以外の方々と一緒に伝えることができたことだけでも胸がいっぱいで、それだけで涙が出て、倒れそうなくらいの感動と興奮でした。自分たちだけで訴えているときとは全く違う何か

大きな力に支えられているような不思議な感じでした」

・「労働組合があるという大きな安心感があるからこそできたことだった」

数十年ぶりに大幅な定数増。ゴールの部分的達成と次なるキャンペーンへ

このキャンペーンの結果、大阪府は数十年ぶりに大幅な定数増へと踏み切りました。各保健所に保健師1人ずつ増員、大阪府全体で104人の定数増へ。保健所の増員はわずかですが、これも数十年ぶりにも保健師の増員を実現することができました。

そして、いま、私たちはこのキャンペーンで新たな希望をつかむこともでき、次のキャンペーンへと足を踏み出そうとしています。また、マスコミ関係者とのつながりもでき、関係も深まり、今では毎週どこかの記者さんが事務所にやって来て、いろいろ情報交換と懇談を行うということもできています。

病院労組を中心にしたキャンペーンチームの立ち上げ、「保健師の声」の継続、職員基本条例見直しキャンペーンも視野に、従来の限定された枠組みの中での住民共同ではなく、より広く、多くの住民のみなさんに私たちの仕事を語り、こんな地域と職場をつくって、こんな仕事がしたいんだという思いを広げていきたいと思います。